目の前のひとりの生まれてきて良かったを、日本の医療から

JAPAN HEART NEWS

吉岡医師の手術活動後、患者さんやご家族たちと。（ミャンマー）

Japan Heart

2024 WINTER

01：カンボジア「15歳の厳しい決断」

02：ミャンマー「命がけで来た難病の子どもと母」

03：ラオス「小児がんプロジェクトに向けて」

04：災害支援「令和6年9月 能登半島豪雨」

05：スマイルスマイルプロジェクト「家族の思い出の海へ」

06：国連 UNIATF Award2024 受賞

01 カンボジア 15歳の厳しい決断

脚を失う決断とその先に向き合う15歳の葛藤

シナちゃんは、現在　右大腿部骨肉腫という病気と闘う15歳の女の子です。骨肉腫とは、骨にできる悪性腫瘍の一種で、骨肉腫が発生している場所には痛みや腫れが出ることが多くなります。
シナちゃんが脚に痛みを覚えたのは11歳の頃。一度は近所のクリニックで処方された薬を飲んで良くなったものの、再び痛みを覚え、プノンペンの病院を受診しました。しかし、なかなか検査結果が出ずに行き詰まり困っていたところ、叔母がFacebookでジャパンハートこども医療センターを見つけます。「小児がんの治療を無償で行ってくれる、日本の団体が運営する病院がある」と知り、当院へ来ました。はじめて脚の痛みを感じてからおよそ3年、14歳のころでした。

しかし、ジャパンハートに来てからも、シナちゃんの治療は順風満帆というわけではありませんでした。告げられたのは「命を守るためには脚を切断しなくてはならない」という非常に厳しい選択。どうしても受け入れられず一度は治療を断り、地元で薬草などを使った伝統療法も試みましたが効果は出ません。ついには耐えられないほどの痛みが走り、ジャパンハートへ戻り入院・手術を決意しました。
術前の化学療法などを経て、今年夏の「吉岡ミッション」（ジャパンハート創設者・小児外科医　吉岡秀人による集中的な手術活動）で手術を実行。想像を絶する恐怖心があったと思いますが、シナちゃんは手術室に入る瞬間まで、看護師に笑顔を見せ続けてくれていました。

手術後、同病棟で入院中の仲間と

手術後、小さい子どもの多い小児病棟ではお姉さん的存在のシナちゃんは、病室で年下の子たちへの面倒見の良い一面も見えました。普段から甥っ子や姪っ子の面倒を見ていたため、子ども好きなようです。
ある日、そんな彼女に将来の夢を聞いたとき、「私は脚もないし、病気だからやりたいことは何もできない。ただ、また家族と一緒に暮らしたい。お母さんに会いたい」と涙をボロボロとこぼしはじめました。普段は病棟内のお姉さんとして明るく過ごしているものの、まだたったの15歳。苦しみや将来への悲観など感情があふれ出てきた瞬間でした。しかし、その後に一言、「お化粧を勉強してみたい。メイクの専門知識を身につけたい」とも伝えてくれました。

そして、僅かながらそんなシナちゃんの夢への第一歩となる日が訪れます。日本人の学生インターンが中心となって、メイクイベントを実施したのです。当日は、日本人の学生インターンが用意したメイク道具を使って、自分だけでなく他の人たちにも楽しそうにメイクをしてあげていました。少しでも夢に近づく時間を届け、悲観していた自分の人生に明るい光を見ることができたなら…と願うばかりです。

スタッフにメイクをしてあげるシナちゃん

小児がんで入院している子どもたちは、学校に行けなかったり、家族と会えなかったり、様々な機会を失っているように見えるかもしれません。それでも、私たちの病院では、「誰もが生まれてきて良かったと思える世界の実現」に向け、心を救う医療として患者さん一人ひとりに寄り添い、日常のなかでさまざまな工夫を凝らしながら、子どもたちが前向きに治療と向き合えるサポートを引き続き模索していきます。

医療の届かない現状がより深刻な途上国の地域医療。本当の意味で医療を届けるためには—

来年10月に新病院「ジャパンハートアジア小児医療センター」の開院を控えるカンボジアですが、現病院※「ジャパンハートこども医療センター」が建設されてから、今年で 9年目を迎えました。さらに遡れば、ジャパンハートがカンボジアで活動を開始してからは15年以上の月日が経過したことになります。

モバイル活動

当初の活動の中心は、「モバイル活動」と呼ばれる、車に医療機材を載せて地方の病院に出向いての診察および手術活動でした。この活動は、病院が建った今でも取り組んでいます。

ジャパンハートのミッション「医療の届かないところに医療を届ける」—この言葉を体現しているモバイル活動ですが、ゆくゆくはそれぞれの病院で自走していくことが必要になります。そのために、今救わなければいけない命を救う手術活動と、地方の医療者の育成の二つの軸で双方行うことが、本当の意味で「医療の届かないところに医療を届ける」を実現することになると考えています。

今年度は、現時点で 3回のモバイル手術活動が行われました。各回10名程度の医療スタッフを地方病院へ派遣し、3日間にわたる集中的手術活動を実施。ジャパンハートの医師と派遣先の病院の医師が 3日間計11件すべての手術に同時に入り、マンツーマンでの指導も行いました。また、術前には、ジャパンハートこども医療センターにて事前に撮影した手術の動画を見せながらのレクチャーも行うことで、知識の共有を深めました。

また、今年は手術活動だけではなく、BLS(Basic Life Support)のレクチャーも実施しました。BLSとは、心肺停止または呼吸停止に対する一次救命処置のことで、カンボジアでは医療者であってもBLSの知識が足りない人も多いのです。モバイル手術活動を行っている 2つの病院に、ジャパンハートの看護師が赴き、各病院の医師・看護師向けにレクチャーを行いました。

※現行病院は、地域医療支援の拠点として、新病院の開院後も運営します

「自分と同じ境遇の人々を救いたい」奨学金支援からリーダー看護師へ

マイ看護師

そして、そのモバイル活動のリーダー役を担っているのが、カンボジア人のマイ看護師です。マイ看護師は、今年で 6年目を迎える看護師で、ジャパンハートの「夢の架け橋プロジェクト」という奨学金事業の卒業生です。彼は、地理的にも経済的にも簡単には医療を受けられない経験を幼少期からしてきました。だからこそ、自分と同じような境遇の人たちを救いたいという思いを持ち医療者を志したこともあり、モバイル活動にも積極的に取り組んでいます。

マイ看護師のように、成績優秀なのに、家庭が貧しいために進学することができない、医師・看護師を目指す地方出身の高校生を支援する活動が夢の架け橋プロジェクトです。これまで多くの里親様に支えられ、今でも 20名の学生が医療者になる夢を叶えるべくジャパンハートの奨学金生として学校に通っています。
今年は 3年ぶりに最高顧問・吉岡秀人医師との座談会も開催されました。会の中で、学生たちは「医療者は小さいときからの夢」「カンボジアの医療が発展してほしい」と想いを語ってくれました。これからもジャパンハートは、現地の医療の未来を担う若者たちが夢を実現できるよう、共に歩み続けていきます。

02 ミャンマー　命がけで来た難病の子どもと母

医療を止めるわけにはいかない—
国難下でも維持ではなく、前進する

国内情勢は引き続き不安定で、国民の生活は徐々に厳しくなっています。頻発する停電にクーデター前から比べると 3–4倍にも上る物価高騰、国内紛争の悪化、そして徴兵制を逃れる若者たちの海外への流出に加え、9月にはジャパンハートが地方医療支援として活動している地域を含め広範囲に渡る大規模な水害にも見舞われました。ミャンマーは、今もなお苦難な状況に立たされ続けています。

ワッチェ慈善病院周辺の状況はというと、一見すると以前と変わらない穏やかな光景が広がっているように見えます。しかし実際には、18時を過ぎると車やバイクの行き来や人影もすっかりとなくなり、時に響き渡る銃声や爆発音に住民たちは息を潜め怯えながら、いつでも避難できる準備を整えて生活しています。少し前までは離れた場所でのことだと思っていた紛争が、身近に迫って来ているのです。
それでも病院には、治療を求めて患者さんたちがやって来ます。上半期には3,416名の外来診察と共に、432件の手術を実施しました。周辺の治安状況が良くないにも関わらず、コロナ以前とほぼ変わらないペースで患者さんが治療を求めて来ていることからも、ミャンマー国内の医療体制がいかに厳しい状況にあるかが分かります。

ピョーくんとお母さん

小さな体にも関わらずお腹だけがパンパンに膨れ上がったピョーくん（4歳）もその一人。ヒルシュスプルング病という腸を動かす神経細胞が生まれつき欠損している病気をもつピョーくんは、ガスや便を上手く出すことができません。小さい頃にお父さんが亡くなり、農業の手伝いをしながら女手一つでピョーくんを育てるお母さんは、「小学校に上がるまでに、何とかこのお腹を治してやりたい」と、道中の治安が悪いにも関わらずピョーくんを連れて命がけで母子二人で来院しました。まずはガスと便で膨らんだお腹をへこますために人工肛門を造る手術をし、ピョー君のお腹はぺたんこに。無事に手術が終わってすやすやと眠るピョー君を、ホッとした表情で見守るお母さんの姿が印象的でした。

8月には病院近くの都市の治安状況の悪化に伴い、現地の日本大使館より日本人に対しワッチェから避難するよう勧告が出されました。吉岡秀人はじめジャパンハートに対し、直々に声もかかりました。
しかし、治安が安定しないなかでも、何とか治療を受けたいと最後の希望をかけて患者さんたちが私たちの元へやって来ます。そして現地スタッフたちも、この状況下でも現場に留まり医療を提供し続けています。医療活動を止めるわけにはいきません。医療支援のニーズが高まっている今だからこそ、可能な限りの活動継続を目指すと共に、新たにヤンゴンでの医療活動開始に向けても準備を進めています。

やっと医療に辿り着けた喜びと安心を届けられるように

ミャンマー専門医療プロジェクト～日本人専門医の派遣～

ミャンマー国内の小児医療体制は、クーデターから 4年近く経過した現在も、なお多くの医療従事者の職務放棄によって厳しい状況が続いています。病気と闘う子どもたちの多くが治療できる場所を探し求め、ワッチェ慈善病院をはじめとする私たちが活動する病院に列をなしています。

そのようななかで、日本の高度な医療技術や知識を現地医療者に伝授すると共に、一人でも多くの子どもに治療を提供するため、連携する子ども専門病院などへ 7回にわたり小児外科・小児循環器・口腔外科の日本人専門家派遣を行ない、計64件の手術を行うことができました。

青山医師による手術と指導

ジャパンハート上級指導医で国立病院機構岡山医療センター名誉院長の青山興司先生にも約4年半ぶりにお越しいただき、医療者不足にて機能しなくなっていた子ども専門病院にて、手術活動と共に現地医療者に対する指導を実施しました。久しぶりに活気の戻った手術室では、少しでも多くを学ぼうと熱心に術野を覗き込む現地医療者の姿がありました。
また、口唇口蓋裂総合治療事業にて 2019年より育成してきた現地口腔外科医たちが、今では各所属病院にて自身で口唇裂や口蓋裂の手術を行うと共に、現地医療者たちとチームを組んでミャンマー各地での移動手術活動にも取り組んでいます。そして9月には、新たに2期生たちの育成にも着手し始めています。
このようにして、たとえ苦しい状況でも目の前の治療行為のみに留まらず、「国の小児医療体制の改善」「持続可能な医療の実現」も重要なミッションとして、力強く一歩ずつ進んでいきます。

Dream Train

充実する教育プログラム、そして施設老朽化の壁

ミャンマーの養育施設Dream Trainは今年、6つの地域から17名の子どもたちを受け入れ、新たなスタートを切りました。今年度から導入された独自のスカラシップ制度により、私立学校に通う子どもは30名に増加。学業に熱心に取り組む子どもたちの姿が影響を与え、学ぶ楽しさが施設全体に波及していくのを感じました。勉強が苦手だった子も自発的に机に向かう姿を見たときには、嬉しい驚きがありました。
また、私たちは探究心や好奇心を引き出す体験型学習にも力を注いでいます。新型コロナとクーデターの影響で長らく行えていなかった遠足ですが、5年ぶりに再開し、クーデターによる治安面のリスクを最小限に抑える形としてヤンゴン近郊を巡りました。なかには、これが初めての旅行という子どもたちもおり、それぞれが新しい興味の扉を開く体験となりました。夏には「植物を育てる日」も開催し、庭作りを通じて自然と触れ合いました。この庭は、今も子どもたちにとって大切な癒しの空間です。
さらに、文化的な体験も充実しています。アジアの芸術家や専門家のご協力により、期間限定のアートスペースが設けられたほか、国内で活躍するバンドによる生演奏会も2回開催されました。子どもたちは個性豊かなアーティストの表現に触れることで、新たな視点で世界を見つめる機会を得ました。

自分たちが描いた絵を誇らしげに

雨漏りがひどく天井がはがれている

一方、教育の取り組みが充実する中、施設の老朽化が深刻な問題となっています。2010年の設立以来、修繕や増設を繰り返してきましたが、雨季のたびに発生する雨漏りや排水不足による冠水で衛生環境が悪化しています。加えて、一人ひとりの成長段階に適した生活環境が整っていないのも大きな課題です。これらを解決し、子どもたちが安心して過ごせる快適な居場所を整備するために、現在、大規模な新棟建設プロジェクトを進めています。

03 ラオス 小児がんプロジェクトに向けて

この国でも、小児がん無償治療を —技術移転の拡大と展望

患児を見守る子ども病院の看護師

ジャパンハートは今年1月から、ヴィエンチャンの国立子ども病院と共に「小児固形がん周手術期技術移転プロジェクト（以下、小児がんプロジェクト）」を開始し、2025年の手術活動に向けて準備を進めています。現時点では政府との覚書の条件に合う患者が見つかっておらず、具体的な医療活動はまだ始まっていませんが、プロジェクトを推進するため、ラオス国内でのSNSの発信や、地方の病院・ヘルスケアセンターへの訪問を通じて、広報活動を展開しています。さらに、手術活動に入ってもらう想定の子ども病院の外科医師と手術室看護師をカンボジアのジャパンハートこども医療センターへ招き、小児がん治療の現場を見学してもらいました。

ラオスでは医療保険制度が十分に機能しておらず、経済的な負担から患者が治療を受けにくいという課題があります。このため、病気の早期発見が困難であり、治療を受けても途中で中断するケースが多い状況です。ラオスの子ども病院ではまだ十分な治療ができないため小児がんプロジェクトのメインターゲットとしている肝芽腫は、もともと患者数が少ない病気ですが、医療機関の受診障壁が高いことも患者発見の妨げとなっています。
小児固形がん、特に肝芽腫の治療には高度な手術技術とリスク管理が必要ですが、これらは簡単に習得できるものではありません。覚書の条件に適合するメインターゲットの患者が見つかるまで待っているだけでは、プロジェクト期間内に必要な技術や知識を習得できるか不安が残ります。そこで、私たちはこの状況を踏まえ、プロジェクトの対象を小児消化器系疾患全般に広げ、より多くの技術移転の機会を設ける方針に変更しました。

9月には子ども病院でフィールドリサーチを行い、今後の医療活動に向けた必要な調整を進めています。また、11月以降は毎月、子ども病院の医療者と共にケーススタディを実施し、小児がん治療に必要な知識の向上と協力体制の構築を目指します。来年の手術活動に向け、子ども病院の医療者たちの意識も確実に高まっているのを感じます。

甲状腺プロジェクト
ラオス人医師にエコーの指導をする伊藤研一先生（右）

新たなプロジェクトが進行するのと同時に、過去から取り組んできた甲状腺疾患治療プロジェクトも次のステージへ進もうとしています。プロジェクト終了後はラオス人医療者が自ら患者さんを治療する必要がありますが、そのためには内科診療技術の向上が必要です。私たちはこの課題を解決するために、10月に信州大学病院の伊藤研一先生を招き、集中的な内科診療指導を実施しました。当日は、日本人の医師が診察してくれるとの噂を聞きつけ、4日間で合計106名もの患者さんが訪れました。小児や妊婦を含む様々な症状の患者さんの診察を通して、伊藤先生からはラオス人医師たちへ、エコーの使い方を中心にできる限り多くのことを伝えていただきました。ラオス人医師からは伊藤先生への感謝の言葉と共に、今回の取り組みにより、以前よりも自信をもって内科診療を行えるとの声があがりました。
このような活動の先に、ラオス人医療者が自国の人々の暮らしを守っていける未来があると信じて、私たちは挑戦を続けます。

04 災害支援　令和6年9月 能登半島豪雨

地震から9カ月で被災地を再び襲った能登豪雨

9月21日から22日にかけて能登半島を襲った激しい雨は、同地域の降水量記録を次々に塗り替え、住民には警戒レベル5「緊急安全確保」の避難警報が発令されました。7〜8月にかけて奥能登の被災地域ではおおむね仮設住宅の設置が完了し、半年以上避難生活をしていた住民や自治体職員の方々が「ようやく一息つける」と胸を撫でおろした直後の、再びの大災害。

能登で継続して支援を実施している団体として、被災規模がどうあれ今回は行かないという選択肢はない―そのような想いでジャパンハートは即座に医療チーム派遣を決定し、21日夜には災害ボランティア登録メンバーによる第一陣が参集拠点に到着、翌22日には輪島市内で活動を開始することとなりました。

地震を耐え抜いた家屋にも土砂が流れ込み居住不可能に

輪島市内には当初40か所ほどの避難所が開設され、特に河川に近いエリアの住民を中心に600名以上の方が避難しているとの情報を入手。更に、私たちが主に被災者の方の心のケアとしてサロン活動を継続している門前地域においても、復旧したばかりのトンネルが不通になったことで海岸沿いの七浦地区が再び孤立し、連絡が取れない状況となっていました。
ジャパンハートは保健医療福祉調整本部との連携のもと市内約15か所の避難所の巡回を行い、初期調査と避難者の健康観察、保健衛生的な観点での環境整備を10月11日までお手伝いさせていただきました。

輪島市七浦公民館でのおしゃべり喫茶

今回の災害では、地震による斜面の崩落や土砂が堆積している状況での豪雨により、ハザードマップで洪水が想定されていなかった地域でも氾濫が発生しました。倒壊家屋は土砂に覆われ、地震で無事であった建物にも汚泥が流れ込み、河川には流木が堆積しています。豪雨を機に更に職員数が減り、運営が危ぶまれる福祉施設やサービス。一方で、「もう避難所には戻りたくない」と孤立地域に残る方や、「自宅に戻りたいが、冬に積雪してまた孤立するのでは」と避難生活を続ける方、そのような不安を抱える住民を支え続ける地域の自治体職員や支援者の方々。私たちには今、何ができるのでしょうか。

ジャパンハートが6月より輪島市と能登町の仮設住宅集会所で毎月実施している「おしゃべり喫茶」は、医師も看護師もエプロンを着用し、他愛のない会話の中で気軽に健康相談ができる場づくりと、声なき声の拾い上げを目的としています。豪雨直後の10月企画には約120名の住民の方々にご参加いただき、特に上述の七浦地区では、避難先である門前中心地の小学校と仮設住宅に近い公民館の2か所で開催したことで、自宅に残られた方のお話も伺うことができました。可能な限り多くの支援を届けるべく、喫茶と並行して約30件の個別訪問を行うことで、自主的には喫茶に参加が出来ない方にもアクセスしています。
活動を継続する中で、「知り合いやご近所には言いづらい、外部の支援者にだから言える悩みや相談」も多く聞かれるようになりました。誰かに打ち明けることで、ほんの少しでも心が軽くなる、孤独を感じずに済むお手伝いが出来るのならば、それ以上のことはありません。微力ではありますが、私たちは地道なこの活動を、来年夏頃まで継続していく予定です。

05 スマイルスマイルプロジェクト

「家族の思い出の海に行きたい」

治療をがんばったご褒美に特別な時間を

小児がんの子どもと家族のお出掛けをサポートするこの活動。8月、がんが見つかる前までお子さんとご家族が毎年行っていた思い出の海に行きたいと依頼がありました。2年近くにわたる治療のなかでAちゃんは足の手術も経験しましたが、闘病中の時のことを「楽しかったこともあったし、良いこともあったんだよ」と話してくれるなど、持ち前の明るさで後遺症へのリハビリを乗り越え、走ることもできるようになりました。旅行準備では、そんな頑張り屋さんのAちゃんにとってご褒美の時間となるよう、2年ぶりの沖縄旅行への不安を一つひとつ解決していきました。

そして当日。ホテルの部屋からは思い出の海が一望でき、3日間、大好きなビーチや思い出の料理屋さんを巡って過ごし、Aちゃんのとびきりの笑顔がたくさん見られました。食事の際はAちゃんの食べっぷりに「前に来たときは背も小さかったのに、たくさん食べられるようになったね」と微笑ましく見つめるお母さん。また、お父さんは旅行を通じて「2年近く治療を頑張ってきて、元気になってまたこの海を見られるとは考えられなかったです。本当に良かった」と涙ながらに話してくれました。

この活動は、小児がん治療中から治療後1年以内の方にご利用いただけます。治療中の不安と必死に向き合ってきたご家族のなかには、治療を終えてやっと家族の思い出づくりのための外出について考えることができたという方もいます。現在、医療の向上により日本では小児がんは8割が治る病気となっている一方で、治療の影響により「晩期合併症」と付き合っていかなければならないお子さんも少なくありません。スマイルスマイルプロジェクト参加を通じた家族でのかけがえのない思い出の時間が、治療後も続く晩期合併症や再発への不安と向き合っていく原動力となると信じています。

06 国連より「UNIATF Award 2024」を日本で唯一受賞

ジャパンハートのカンボジアの活動が評価され、国際連合が授与する「United Nations Inter-Agency Task Force on the Prevention and Control of Non-communicable Diseases Award 2024」を日本で唯一受賞しました。
本賞は、グローバルレベルで、NCDs（以下　非感染性疾患）、メンタルヘルス、その他のNCD関連のSDGsの予防などにおいて顕著な貢献をしているNGOや機関を国連が表彰するもので、国連のウェブサイトにおいて今回授賞した世界各国14団体・機関にジャパンハートが名を連ねました。

ジャパンハートでは、世界第一位の死因である非感染症疾患のうち、高所得国と中低所得国の生存率格差が著しい小児がんに対し、外科手術を含む無償治療に取り組んでいます。また、治療の域を越え、「持続可能な医療の実現」に向け、病院での運営体制・教育や、医療者をめざす貧困層の若者に対する奨学金制度などを通じて、現地国籍の医療者の人材育成にも注力しています。
このたびの受賞は、これらの活動が世界的に評価された形となります。これもひとえに、活動を日頃から応援してくださる皆様一人ひとりのおかげです。この場を借りて、改めて心より感謝申し上げます。

カンボジアスタッフ　（左）藤井看護師長
（右）スリエン オフィスマネージャー

特定非営利活動法人ジャパンハート
〒111-0042 東京都台東区寿1-5-10 1510ビル 3F
電話：03-6240-1564（平日10：00-17：00/土日祝除く）